



JAC GUNMA

公益社団法人

# 日本山岳会

群馬支部報

第27号

2026年  
3月1日

年頭所感

## 初日の出に思う

公益社団法人日本山岳会 群馬支部長 根井 康雄

2026年元旦は例年通りふるさと赤城の長七郎山で会員たちと迎えました。上空には雲一つなく、風も弱くスッキリと晴れ渡っていましたが、東南の地平線付近には低い雲がたなびいていました。その雲の上にひときわ輝く光の点が見えたかと思うと、やがて大きくてまぶしい太陽が昇り、山頂に立つわれわれを明るく温かく照らしてくれました。山登りを続けていてよかったと素直に思うひと時です。今年もそんなひと時を四季折々に織り込んだ山登りを、素晴らしい仲間たちと心豊かに続けて行きたいと思いました。

さて、新年にあたり年頭の所感を述べさせていたきたいと思います。

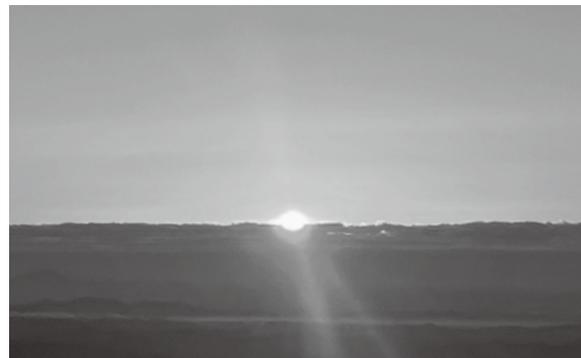
昨年は活発な支部山行や行事などを通して大変お世話になりました。ただ、かけがえのない大切な仲間を失うという悲しい1年でもありました。

安全で楽しい登山。この言葉を口で言うのはたやすいことですが、一人一人がしっかりと安全登山を身につけていくことで、2026年を、元旦の長七郎で迎えた初日の出のように明るく輝く1年にしていければと思います。

そして骨太の山岳会への脱皮もまだまだ道半ばではありますが、一步一步少しずつ前に進んできたと思います。今後はさらに登山者としての経験・技術の蓄積と高度化、そしてその論理的な構築はもちろんですが、より一層しっかりとした組織運営と情報共有にもとづく風通しの良い快適なクラブライフのために、みなさん一人一人のお力をお願いします。去年より1回でも2回でもいいですから、より積極的に会議や行事・山行に参加していただきたいと思っています。そうすることで支部の活動が一段と活発化し、会員間のコミュニケーションもより血の通ったものになるはずです。

今年のあらたな試みについて主なものをあげてみます。

まず、来年度からの発行に向けて、2冊の山岳書

2026年元旦  
長七郎山にて

の執筆・編集を県の「みやま文庫」から依頼されています。一つは平野紀子顧問にお願いして、「尾瀬」を語っていただくという内容で、広報委員会の支部報チーム有志が取材・編集にあたります。長蔵小屋の前庭や尾瀬沼の畔で、あるいは昭和の香り漂う談話室で平野さんや入沢祐明（すけ）さんの語りに耳を傾けているような心にしみる本を目指したいと思っています。もう一冊は群馬の登山史で、八木原罔明さんをメインライターに私も微力ながら協力させていただき、群馬大学の歴史地理がご専門の関戸明子教授のご助力などいただきながら、江戸時代にまでさかのぼって、現代まで続く群馬の登山の歴史を決定版としてあらためてまとめるという意欲作です。このような本格的な出版企画は一部を除き支部レベルでは貴重なものと言えるでしょう。

また3月には健康登山についての座学と実地山行を、齋藤繁副支部長を中心に、久しぶりに支部主催（上毛新聞社との2者主催）で行います。さらには11月には関東四支部懇でヤマテンの猪熊隆之さん（日本山岳会員）の座学と山の天気ライブ授業を予定しています。なお、本部行事ですが、7月に白山集中、9月には立山での全国支部懇も予定されています。

今年も、今まで以上に盛りだくさんに、さまざまな企画に取り組んでいきます。ぜひ皆さんのお力をお寄せいただき、より充実した群馬支部を目指していきたいと思っています。

## 尾瀬合宿

群馬支部秋の恒例行事の尾瀬合宿。今年も尾瀬湖畔の長蔵小屋で10月4日・5日の2日間にわたって開催された。それぞれの班が様々なルートの山行を楽しみ、午後5時前には参加者23人全員が無事笑顔で集合できた。今年には福島支部に加え、東京支部からの参加もあり、終始、和やかで賑やかな打ち解けた雰囲気の中、支部を超えた交流を広めることができた。また、登山道問題や尾瀬の環境についてなどの意見交流もあり、充実した2日間となった。

(田中 規王)

## 2年越しの燧ヶ岳

10月4日から5日にかけて行われた尾瀬合宿では、燧ヶ岳に登った。大清水から入山し、穏やかな晴天のもと尾瀬沼を時計回りに半周する。紅葉にはまだ少し早い。静かな水面を眺めながら沼尻休憩所へ向かい、そこからナデッ窪の急登に取り付く。大きな岩にしがみつような登りに息は上がるが、振り返れば眼下に尾瀬沼が広がり、さらに高度を上げるにつれて尾瀬ヶ原も望まれ、それらの雄大な景色に励まされる。次第に雲行きが怪しくなる中、まず俎嶺へ。去年の合宿ではここまでで下山したため、続く柴安嶺は念願の初登頂となった。山頂はいずれもガスに包まれて眺望はなく、強風のため長くとどまることはできなかったが、2年越しで双耳峰に立てた喜びと達成感は格別であった。下山は長英新道を取り長蔵小屋へ。別ルートで到着した群馬支部、福島支部、東京支部の方々と合流し、山行の感想や経験を語り合う賑やかな夜を過ごした。支部の枠を超えた交流は、合宿ならではの貴重なひとときとなった。

(白石 直子)



柴安嶺山頂にて

## 鉄旅奥只見湖ルート

新入会の関谷です。どうぞよろしくお願ひいたします。

初となる尾瀬合宿。山歩きのきっかけを与えてくれた尾瀬を船で入山するという未知のルート。事前に2日間のルートを地図に書き込むと、なんと！ハート型になるではないか。この時点でワクワクしてくる。

浦佐駅でメンバー4人が集合し、バスで奥只見ダムへ。1日目の目玉である40分の湖上遊覧。



奥只見湖上遊覧

風を受けながら秘境奥只見の景観を堪能。燧ヶ岳など名山に囲まれた湖は格別です。尾瀬口着後バスで沼山峠へ。

休憩し長蔵小屋へトレッキングの開始。木道を歩き小淵沢田代へ、黄金色の草紅葉が美しい。霞む神秘的な湿原を前に一瞬が止まり無音の別世界に舞い込んだ感覚になった。これは尾瀬の魔法なのか、自然の不思議な力に驚かされる。

小屋到着後、福島支部・東京支部の方々と合流し夕食後は宴の始まり。福島銘酒の数々が紹介され、ここでは大いに呑むのが流儀のようだ。終始緊張しっぱなしの下戸の新入りに、諸先輩方の優しさ、貴重なお話にとっても心温かくなりました。

翌朝小雨模様の中、東京支部と共に平野家のお墓をお参りし再会を願ひお別れをする。

鉄旅2日目の目玉は会津郷土料理。のどかな風景を眺めながら目的の店『渋川問屋』へ。にしんを使った料理の数々を楽しみました。

何もかもが初めての実りある贅沢な2日間でした。

(関谷 純子)



霧と草紅葉の小淵沢田代

## ランタントレッキング2025

佐藤 光由

1982年ダウラギリ I 峰ベアルートを終えた私は、ビザの再取得のためインドのダーズリンを往復してネパールに再入国し、ランタン谷トレッキングに向かった。あれから43年たった今年再びランタン谷を訪れた。一緒に行くのはJAC会員の妻、佐藤緑と中島あづさ、妻の友人2人。

11月25日 8:00カトマンズを出発。43年前は52km手前のトリスリバザールからだった。約2日の行程を車で行けるようになった。約115kmをランドクルーザーで走る。カトマンズ盆地を抜けるとガネッシュヒマールやマナスルを見ることができた。ランタンリルンも姿を現す。14:00にシャブルベシに到着。

11月26日 7:52シャブルベシを出発。ランタン谷に入る手前に中国の援助で水力発電所を建設中。取水口があるドーメンまで工事用道路を歩く。野生の猿ラングールがお出迎えしてくれる。ドーメンより山道に入る。標高が低いので歩くと暑いくらい。ランタン谷左岸のうっそうとした森の中を進む。バンブーでスパゲッティのお昼を食べる。ここから右岸に移って急登となる。不覚にも足がつってしまい芍薬甘草湯を飲むはめに！ 15:06ラマホテルに到着。さっそくビール！ 800Rs880円だ。日本と変わらない。今日の行程は11.5km登り1518m下り519mだった。

11月27日 7:47ラマホテルを出発。右岸を行くとまたラングールが出てきた。シャクナゲの木が日本と違って大きい。左岸に移る橋のあたりでレッサーパンダを見たという情報があったが出会えず。また右岸に移ってゴダタペラで昼食。ここら辺から谷が開けてくる。森林限界は3100mくらいだと思われる。はるか遠くにランタン村が見えてくる。2015年のネパール大地震で崩壊した岩を左手に確認して15:30ランタン村に到着。10年前の地震ではランタン村近くの岩が崩壊し、雪をともなった土石流が川の対岸まで駆け上がり、戻ってきた土石流でランタン村は一瞬にして無くなってしまった。約300人が犠牲になった。現在は復興が進みたくさんの方が建っている。43年前は十数軒しかなかったと記憶している。今日の行程は11.4km登り1189m下り239m。

11月28日 8:08ランタン村を出発。広くなった谷の右岸に行く。氷河のモレーン地形が出てくるともうすぐキャンジュンゴンパだ。左手からランタンリルン氷河から流れ出た川を渡る。ランタン氷河にもモレーンがあり、その近くに氷河湖ができています。



復興が進むランタン村

この水を使って水力発電をしていた。氷河湖が崩壊しないように管理されているか心配になる。11:43キャンジュンゴンパ到着。



カラフルなホテル街となったキャンジュンゴンパ

キャンジュンゴンパ (3840m) で昼食をとってから高所順応のために裏山を散策。眼下にカラフルなホテル街が見える。富士山より高い場所のためゆっくり登ってからおろる。帰りがけにチーズ工場に寄る。ヤクチーズが100gで220円、良いつまみできた。ホテルに帰ってシャワー。43年前は考えもしなかった。

11月29日 7:52キャンジュンゴンパを出発。今回のトレッキングメインの日だ。高所なので意識してゆっくり登る。夏になると放牧地になる場所だ。登ること3時間。10:40によくキャンジュン・リに到着。山頂の標識には4700mとあるがYAMAPだと4604m。ランタンリルンが大きく見えてその下にはランタンリルン氷河。モレーンの近くには大きな氷河湖。右に行くと、ヤラピーク、ランシサリ、ガンチェンポ、ボンゲンドクフの山々。ヒマラヤを実感できた。360度の展望を楽しんで記念撮影をして下山。12:35キャンジュンゴンパに帰着。お昼を食べてからランタン村手前のムンドウまでくだる。できるだけ高所にいない方が楽だ。珍しく夫が良く働くホテルに泊まった。もちろんそれ以上に妻は働いている。毎回の食事はガイド達が手を加え日本風にしてくれる。海苔巻き寿司、日本風のうどんなど。意外にも本場のカレーよりも日本のバーモントカレーが好評。

11月30日 7:25にムンドウを出発。8時頃に復

興進むランタンに到着。多少の登りはあるがほとんどが下り、14:14行きに泊まったラマホテルに到着。標高は2480mここまで下れば飲んでも大丈夫。ポップコーンでビール！11月最後ともなるとトレッカーが少なくなるのでお店番は若いアルバイト1人。我がスタッフとポーターが大きなかまどで夕食を作るのを手伝っていた。

12月1日8:00ラマホテルを出発。トレッキング最後の日。下りがほとんどなので13:40出発地のシャブルベンに到着。シャワーで汗を流す。

12月2日帰りはハイエースより一回り大きい中国の電気自動車。カトマンズまで130km高低差3000mの悪路を途中1回1時間の充電で走り切った。中国

の電気自動車はすごい！日本の自動車産業はどうなってしまうのか心配になる。

12月3日古都パタンを見学してからヒマラヤの山々を眺められるナガルコットへ。20年前に泊まったホテルは倍以上の規模となり名前が変わっていた。翌日の朝にかけて、マナスル、ガネッシュヒマール、ランタンヒマール、ロールワリンヒマールの眺めを堪能した。

12月5日カトマンズで買い物をし、夜行便で成田へ。天気にも恵まれ、楽しいトレッキングだった。

今年はエベレストBC、カラパタールへ3週間かけていく予定。今から楽しみだ。希望者がいたら声をかけてください。

## 山行報告

### 両神山で研修山行

9月20日（土）に埼玉県秩父にある百名山の両神山に、参加者6人で研修登山をしてまいりました。今回は安全研修委員会の加藤委員長を中心に、道迷いをしないために、目安となる各地図上のポイントで自分が現在どこの場所にいるかを確認しながら登っていきました。コースは山中豊彦さんが管理整備している私有地の白井差新道ルートで、標高差約860mの頂上1723mに至るルートです。白井差登山口から林道を進むと見事な縦長の昇竜ノ滝があり、そこから先は苔が生えた見事な溪流に沿って登山、やまび

両神山頂上に無事到達し  
笑顔で記念写真



こ橋からオオドリ河原は木の橋や木の階段が続きます。水晶坂からブナ平までは急登が続き疲れたためブナ平の開けた場所で長めの休憩を取り、その後もつづら折りの急登が続く道を行くと景色が良い夢見平に到着。休憩と写真撮影後は稜線鞍部を進み日向大谷コース分岐点に到着し、木のテーブルとイスがある場所で軽めの休憩を取り、最後の難所岩場である鎖場を滑落に注意しながら登り頂上に12時30分頃到着。

残念ながら雲が多く富士山や八ヶ岳などの山々は見られませんでした。昼食と参加者で記念写真撮影

をして13時過ぎに下山を開始し、16時頃に白井差登山口に到着しました。到着後に山中さんからスイカと両神山バッジをいただき、参加者でスイカを食べながら埼玉県警の山岳救助隊の指導と救助を長年している山中さんの体験談と数々の感謝状を拝見させていただきました。長い時間の歩行で辛かったですが、参加者全員が登頂でき、けがもなく楽しい研修でした。（岡田 晶彦）

### 那須岳安全登山研修と

#### 奥那須の秘湯「三斗小屋温泉」

10月19日（日）11:30、川端リーダー・加藤ガイド・中村・浅海夫婦・武藤夫婦と阿部の8人が登山口である沼ツ原駐車場に集合し、安全研修山行として三斗小屋温泉を目指した。清々しい気候の中で、熊対策のガイドラインに沿って電子笛と熊ホーンを鳴らしながら地図読み、危険個所の地形などを加藤ガイドの解説で研修しながら進んだ。

奥那須の秘湯には情緒あふれる2軒の宿があり、我々は大黒屋旅館にお世話になった。名物である檜の風呂（女性）と岩風呂（男性）で身体を芯から癒やした後は全員が一部屋に集合。昔ながらのお膳とお櫃が運ばれ、消灯まで輪になって杯を交わし、秘



山行のもう1つの楽しみ食事しながらの研修



大黒屋旅館



茶臼岳を背景に記念写真

境の宿の雰囲気と最高の温泉が楽しめた。

翌日は7:30出発。霧がかかって気温が低い朝を迎え、熊対策をしながら剣が峰から茶臼岳へ向かう。急な天候変化に対する対処などの研修を予定していたが、山がお膳立てをされていたかのごとく濃霧と強風にみまわれた。一昨年の遭難事故(4人の犠牲者)に酷似した天候となり、図らずも実践的な研修となった。剣が峰をトラバースし避難小屋で暖を取り、茶臼岳も西面をトラバースして姥が平に下りた頃には天候も回復し素晴らしい景観が目の前に広がった。その後も地形のレクチャーを受けながら沼原に下山した。

今回は山の方で研修の舞台を整えてくれたかのような研修となった。(阿部 博行)

### 谷川連峰高倉山 高倉沢右俣遡行

ロープウェイを使えば天神平から散策道で容易に登れる高倉山だが、今回は高倉沢右俣から沢登りで頂を目指した。湯檜曾川を渡渉して高倉沢に入ると、すぐにナメ床が連続し、磨かれた石肌を流れ落ちるナメ滝が現れる。国道291号からわずかの距離に、これほど美しい溪相が広がっていることに一同驚嘆した。

小滝をいくつか快適に越え、二俣を右俣へ。沢はやがてスラブに変わり、ロープを使用して慎重に高度を稼ぐ。途中、傾斜の強い草付きと濃いヤブ漕ぎに苦労したが、雨の降る前に突破し尾根へと抜け上



滝場



トイ状の滝

がった。最後は雨に打たれながらやぶ尾根を辿り、高倉山山頂へ到着。

高倉山東面は、谷川岳東面と同じように豪雪の影響による峻険な地形が随所に見られ、谷川岳らしい

美しさと厳しさが凝縮された、コンパクトながら充実感のある好ルートであった。踏み慣れた山でも、ルートを変えれば新しい発見と学びがあることを実感した山行となった。

(原澤 修)



草付きのスラブ帯

### 月山と鳥海山

8月23日~25日、川端さん、星野さんと月山、鳥海山へ登った。初日は月山姥沢コース、往復4時間半の山行だ。月山の登山道は山岳信仰の古道でもあり石畳が心地よい。時折聞こえてくる法螺貝の音に感動を覚えた。頂上に鎮座する月山神社本宮には神職が滞在しており、ご祈祷後参拝、下山は姥ヶ岳へ回った。

翌日の鳥海山は象潟コース。鳥海山大物忌神社まで外輪山を回り5時間の山行となるが、隣接する小屋泊まりなので先を急ぐこともない。時折振り返り、日本海を見下ろす。小屋の裏手には万年雪があり、かつては氷河が形成されていたという説もある。小屋でひと休み後いよいよ鳥海山山頂へ。岩稜帯なので足場を探しながら慎重に登った。山頂からは庄内平野と共に日本海が望め、美しい夕景を堪能した。翌日、期待していた『影鳥海』は拝めなかったが、下山時はすばらしい天気だった。晩夏の花々を愛でながら、いにしえ人の信仰心に思いを馳せて登った東北2座だった。

(浦野有紀子)



残雪と鳥海山(奥)

## 自然観察会下 秋の赤城山を満喫

一般参加者を募って実施する公益事業の一つとして、秋の赤城山自然観察会を10月12日（日）に行った。当初は11日（土）を予定していたが、前日の10日の天気予報で11日は雨が予想されたため、予備日の12日に順延して実施した。

結果はオーライ。前日の雨がうそのような天気、12日は朝から晴れ。昼食は当初の予定通り長七郎山頂でとったが、日差しが強くて少し暑いくらいだった。

一般参加者は順延した影響で16人から5人減って11人となってしまったものの、集合時間の8時半前には全員そろってほっと一息。根井支部長のあいさつのもと、参加者は加藤リーダーの進行でストレッチを行いスタートした。班分けは袋の中に入れた2種類のドングリを参加者に引いてもらって2班に分けた。

コースは、小沼駐車場から小沼を時計回りに半周した後、おとぎの森をまわって、茶ノ木畑下まで行ってVの字で戻ることになった。その後長七郎山登山。山頂で昼食後下山し、小沼駐車場へ予定の午後2時半前に戻った。眼下に雲海が広がる山頂では小池事務局長が赤城山の成り立ちを紙芝居でレクチャー。紙芝居が終わると参加者から拍手が沸き起こった。KP法（紙芝居プレゼンテーション）の威力恐るべし。参加者の満足そうな表情が印象的だった。

また、今回はフィールドビンゴのカードを作成、参加者1人1人に持ってもらい、カードに記入され



紙芝居により赤城山の成り立ちをレクチャー

た木の実などを探しながらコースをまわった。ビンゴになった参加者（全員がビンゴ）には特製のドングリペンダントを終了間際にプレゼントした。受付時には「赤城山の花ごよみ」と地図も手渡した。

今回は参加費を大人千円、子ども500円としたが、結果的に小学5年生の男子が1人参加してくれてよかった。また、自然保護委員会を事前にZoomで行い、役割分担をしていたため、運営もスムーズにできたように思う。終了後に振り返りをしなかったために、問題点や改善すべき点などは今後の自然保護委員会（Zoom）で話し合えればと思っている。ご協力いただいたスタッフのみなさんありがとうございました。

なお、今回はリーダーを務めていただいた加藤さんと10月8日に下見を行い、準備を整えた。参加者募集は、群馬支部のホームページ、上毛新聞「ぱれっと」、エフエムぐんま「タウン情報」で行ったほか、春に実施する予定だった奥日光自然観察会（雨で中止）の際、申し込みのあった方1人1人にメールでお知らせした。（自然保護委員長 木暮 幸弘）

## 群馬支部ユース合宿

日本山岳会群馬支部ユース山行が11月29日から30日にかけて1泊2日で開催された。群馬支部ユースメンバー5人は、雪に覆われた谷川岳を望みながら、湯檜曾川新道をトレッキングで楽しんだ。登頂後の眺望で知



一ノ倉沢尾根末端にて、うっすら雪化粧した谷川岳をバックに

られる谷川岳だが、麓から見上げる堂々とした山容にも、また異なる魅力が感じられた。道中には、過去に谷川岳で命を落とした登山者を悼む慰霊碑が数多く設けられており、世界的にも多いとされる同山の遭難事故の歴史を改めて実感する機会となった。その後、原澤さんによるマルチピッチのトープワーク講習が行われ実践的な技術を学ぶことができた。夜は民宿なかじまにて食事と温泉で冷えた体を癒やしつつ、宿を訪れていたMAB（Man and the Biosphere）ユースのメンバーと自然環境の保全と活用をテーマに意見交換するなど有意義な時間を過ごした。初のユース交流合宿を通して、道中での興味深い山話や宿での交流は今後の登山活動に繋げるべきものであった。次の開催に向け、自身の登山スキル向上に努める考えである。（大里 有佳）

## 巻機山米子沢遭難事故 から学ぶべきこと

2025年10月19日、岳連加盟団体の混成パーティー4人による巻機山米子沢登山中、瀬沼聡さん(当時69歳)が急性心不全で亡くなられた。心からご冥福をお祈りしたい。

事故報告書はすでに配布され既読と思うが、そこから学び取れるものを整理しておきたい。

第1の問題はルート選択のミスとターニングポイントの欠落である。本パーティーはYAMAPの標準タイムの3倍の時間を要し、夕刻が迫るまで、中流部を登り続けるのみであった。またパーティーのレベルとルートとのミスマッチに加え、ターニングポイントの欠落が背景にあることも指摘しておかなければならない。

第2に健康の問題がある。体調管理や持病のケアは極めて重要であり、本人はもちろん、リーダーとパーティー全員はお互いの体調や登高の様子に万全の注意をはらわなければならない。そして撤退の判断はターニングポイントとともに常にリーダーの頭に入れておくべききわめて重要なものである。

第3は不安定な場所での過酷な雨中のビバークである。雨具のみでの不安定な体制でのビバークは心身のダメージ・ストレスとなったことであろう。その点からもより早い時点での適切な判断が必要であった。

第4に危急時のパーティーのあり方が問われる。今回は結果的に4人パーティーが3分割されることになってしまったが、パーティーの分割は捜索・救助対象が複数に分断され、分割されたメンバーはさらに弱体化し、二重遭難を引き起こす危険性も増大する。

第5に、登山におけるリスク管理の問題が挙げられる。山岳保険は登山者にとって必須のものである。またココヘリは登山アプリのみまもり機能も含め要救助者の位置特定に有効なアイテムであり、いずれかは登山者として実装しておくべきものである。

さらに、今回の山行は群馬支部に登山計画書が提出されていなかった。現行ルールでは今回のケースは規程違反ではないが、群馬支部として今回の事故についての十分な情報収集、初動対応ができなかった点は大きな反省材料である。今後、登山計画書の提出は例外なく必須とするべきであり、登山保険の加入状況やココヘリ、みまもり機能の利用状況などの遭難対策の調査・検討も行っていくべきだろう。

(根井 康雄)

## NEWS

[速報・短信]

### 日本山岳会創立120周年記念式典・年次晩餐会に出席

12月6日(土)新宿京王プラザホテルに於いて記念式典及び年次晩餐会が開催され、国内外から500人以上が出席し盛大に執り行われた。式典に先立ち、ヨッヘン・ヘムレブ氏による「エベレスト最大の謎ーマロリーとアヴィン捜索40年」、そして重廣恒夫氏による「日本山岳会ヒマラヤ登山の歴史」の2講演が行われた。

式典からは天皇陛下もご臨席され、穏やかな雰囲気にも包まれ、深い感慨を覚えるひとときとなった。



笑顔が集まる晩餐会

初めて出席した年次晩餐会は終始緊張気味ではあったものの、120周年という節目を祝う日に、天皇陛下

をはじめ、山で繋がる皆様方と一緒にできたことはとても誇りに思う。素晴らしく感動した心に残る晩餐会であった。来年も出席する予定であるので、皆さんも是非一緒にしましょう。(星野 弘美)

### 第16回木暮理太郎翁を偲ぶ会

令和7年11月3日(月)に第16回木暮理太郎翁を偲ぶ会が太田市寺井町蛇川河畔の木暮理太郎顕彰碑前にて開催された。日本山岳・スポーツクライミング協会顧問の八木原罔明氏による献酒に始まり、参加者全員による献花の後、木暮理太郎翁を語り継ぐ会の深澤直久氏及び日本山岳会群馬支部長の根井康雄氏のあいさつを頂戴した。今回は日本山岳会・引き継がれる山岳祭プロジェクトリーダーの坂井広志氏をはじめ県内外から多数の来賓の出席を得て盛大に開催された。碑前祭の後には、近くの老舗にて煮ほうとうを食べながら懇談会が行われ、そこでは「木暮理太郎覚書」と題して、語り継ぐ会の宮澤正樹氏によるミニ講演会も行われ、参加者は興味深い話を耳を傾けた。(小池 千秋)



木暮理太郎顕彰碑前にて参加記念撮影

支部長のつづやき③

「山の本」を読む楽しみ

自分が初めて読んだ山の本は、マッターホルンを初登頂したウィンパーの『アルプス登攀記』だった。大峰山に初登山をした小学4、5年生の頃だと思ふ。学校帰りに前橋市役所裏、桃井小学校の北にある前橋市立図書館へ立ち寄って借りた。小学校の図書室にはおそらくそのような類の本がなかったのかもしれない。ただ、なぜ小学生がいきなり市立図書館にまで行って、ウィンパーの本を借りて読んだのか、まったく記憶がない。ただ、下山時の滑落シーンは挿絵とともに鮮明に脳裏に刻まれている。

そこからの流れで深田久弥が著した1957年初版の『ヒマラヤ登攀史』を借りた。1回では済まず、少なくとも2回は借りて何度も読んだと思ふ。裏返ししの袋に挿してある貸し出しカードにはほかの人の名前がないのを見て、なぜか誇らしく思ったことも覚えている。

シシャパンマはネパール名でゴザインタンと呼ばれていて、その本では未踏峰だった。この山に登ってみたいと子ども心に強く思った。最後の8000m峰としての初登は1964年なので、10歳の自分がその本を読んでいた前後に中国隊によって登られたのだろう。そんなゴザインタンの名前はよく覚えている。

金字塔という言葉を知ったのもこの本だ。マナスル初登頂の章で、「日本山岳会の金字塔」というフレーズがまさに輝いていた。

あれから60年以上。谷川の岩や沢、雪を登りながら、技術書やルート本などとともに今西錦司や串田孫一に憧れた青春時代ははるかに過ぎて、今は新刊より、古い本を書棚からおもむろに取り出したり、古書サイトで仕入れたりして読むのが楽しい。山の本はいくつになっても面白い。

山好きなら、ぜひ山の古典にも親しんでいただきたいと思ふ。「晴登雨読」。 (根井 康雄)

事務局だより

【主な活動・事業・イベント】…………… (2025年)

- 木暮祭 (10/26 山梨・金山平)
- 日本山岳会全国支部懇 (10/26・27 大阪・新大阪 および箕面周辺)
- 木暮理太郎翁を偲ぶ会 (11/3 木暮理太郎顕彰碑前)
- 群馬労働山県民ハイク (11/9 南牧村)
- 東海支部ボランティア登山集会 (11/15・16 名古屋)
- 支部山行委員会 (11/20 Zoom)
- 支部報編集会議 (11/25 前橋中央公民館)
- あかぎ林間学校ミーティング (11/27 Zoom)
- ユース合宿 (11/29 みなかみ町・谷川岳周辺)
- 支部事業委員会 (12/1 Zoom)
- 古道プロジェクト会議 (12/1 Zoom)
- 日本山岳会120周年記念式典・晩餐会 (12/6 東京・京王プラザホテル)
- 支部役員会 (12/16 Zoom)
- 支部安全研修委員会 (12/18 Zoom)
- 支部山行ラッセル訓練 (12/27 谷川・白毛門)

(2026年)

- 初日の出登山 (1/1 赤城長七郎山)
- 上毛新聞社新年交歓会 (1/6 前橋・グリーンドーム)
- 支部山行委員会 (1/15 Zoom)
- 町田幸男JMSCA会長就任祝賀会 (1/17 太田・ダ

ニエルハウス)

- あかぎ林間学校ミーティング (1/20 Zoom)
- 群馬支部新年例会 (1/21 高崎・メトロポリタン)
- 関東四支部合同懇談会 (1/24・25 茨城県・大子町周辺 (生瀬富士・袋田の滝等))
- 支部事業委員会 (1/26 Zoom)
- 山岳祭プロジェクト会議 (1/27 Zoom)
- 関東岳連総会 (1/31 高崎)

【今後の主な予定】……………

- 群馬県山岳団体連絡協議会稜線トレイル踏査検討会 (2/14 前橋市内)
- 支部役員会 (2/17 Zoom)
- 健康登山のススメ座学 (3/2 前橋・JOMOスクエア)
- 健康登山のススメ実地登山 (3/7 高崎・観音山)
- 自然観察会 (公募登山) (3/8 玉原高原)
- 日本山岳会指導者養成講習会 (3/14・15 小諸・安藤百福センター)
- 支部例会 (3/18 前橋中央公民館)
- 支部総会 (5/20 前橋中央公民館)

日本山岳会群馬支部報 第27号 2026年3月1日

発行：公益社団法人 日本山岳会群馬支部  
〒371-0051 前橋市上細井町1200-7(根井方)  
<https://shibu.jac1.or.jp/gunma/>  
編集者：広報委員会支部報担当  
発行者：根井 康雄 印刷：上武印刷株式会社